

田島 亀夫 殿
文化庁長官 宮田 亮平 殿
群馬県知事 大澤 正明 殿
群馬県教育長 笠原 寛 殿
群馬県議会議長 織田沢 俊幸 殿
埼玉県知事 上田 清司 殿
埼玉県教育長 小松 弥生 殿
埼玉県議会議長 小林 哲也 殿
伊勢崎市市長 五十嵐 清隆 殿
伊勢崎市教育長 徳江 基行 殿
伊勢崎市議会議長 田島 勉 殿
深谷市長 小島 進 殿
深谷市教育長 小柳 光春 殿
深谷市議会議長 吉田 幸太郎 殿
本庄市長 吉田 信解 殿
本庄市教育長 勝山 勉 殿
本庄市議会議長 小林 猛 殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部
支部長 井上 勝夫

田島亀夫家蚕室の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、伊勢崎市と本庄市にまたがって所在する田島亀夫家住宅は、四件隣の世界遺産・田島弥平旧宅（群馬県伊勢崎市境島村）とともに、幕末から明治初期における当地域の蚕種製造業隆盛を示す貴重な文化遺産です。しかし、上毛新聞 2017（平成 29）年 6 月 27 日の報道によると、田島亀夫家蚕室は現在取り壊しの危機に直面していると聞き及んでおります。

田島亀夫家住宅は、1868（明治元）年建築とされる 2 階建て主屋をはじめ、2 階建て蚕室、土蔵 2 棟、表門、井戸上屋、屋敷神、西面の防風・日除林、背面の洪水除け石垣、など島村における大規模蚕種製造者屋敷を良く留める存在として知られています。特に、南

側から屋敷を眺望した場合、蚕室と主屋の大きな瓦屋根建築が雁行して並び建ち、その屋頂に換気用の越屋根（通称「櫓」）をかかげる姿は、大型蚕種製造建築が多数現存する島村において随一の景観を誇ります。

蚕室の明確な建築年代は不明ですが、明治末から大正初期頃と推定され、1階は貯桑場、2階が蚕室でした。蚕室の利用形態は、昭和40年代の養蚕廃業後に倉庫として利用されてきましたが、基本的な規模・構造・意匠を良く留め、蚕種製造家の蚕室実態を把握することは十分可能です。そうした専門的な評価は別紙見解に示したとおりです。つまり田島亀夫家蚕室は、専用蚕室の良好な遺構が少ない島村において、年代や機能において世界遺産・田島弥平旧宅の桑場(上階は蚕室)の研究を進める上で不可欠な存在です。

このように田島亀夫家蚕室は、幕末から近代における我が国の蚕種製造業を考える上で重要な存在です。しかし、屋敷地が群馬県と埼玉県の間境にあり、蚕室や主屋は埼玉県本庄市側に所在するため、群馬県側からは文化財保護施策対象と認識されていません。また、埼玉県側からも「自県の文化遺産」との積極的姿勢は感じられません。このような県境の悲哀は島村では少なくありません。

一方、田島弥平旧宅の世界遺産登録に伴うバッファゾーン設定には、田島亀夫家住宅はじめ埼玉県境に所在する屋敷数件も含まれています。また、伊勢崎市・本庄市・深谷市は、田島弥平旧宅の世界遺産登録を契機として三市間の行政連絡会議を行ったり、絹文化や郷土の偉人顕彰を通じた観光連携を試行したり、地域の歴史的資産を行政の枠を超えて活かす試みも芽生えています。

貴下におかれましては、この貴重な建物と敷地の持つ文化的意義と歴史的価値についてあらためてご確認いただき、田島亀夫家蚕室の保存問題を契機として、県境を横断した行政連携による「文化遺産保存活用を核とした魅力ある地域づくり創出」について、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

田島亀夫家蚕室についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部
歴史意匠専門研究委員会
主査 海老澤 模奈人

1. 建物の概要

群馬県伊勢崎市島村は、利根川中流域の氾濫原と冬の季節風という厳しい立地条件を、良質な桑生産に活かし江戸時代後期以降蚕種製造を様々に試み、幕末に至り国内蚕種製造の一大産地の地位を築く。その過程において、栗原家や田島家などの篤農を中心に養蚕理論・実践の研鑽が進み、2階建て・棧瓦葺きで屋頂に越屋根形式の換気装置を持つ大規模蚕種製造建築を創出した。なかでも1872(明治5)年に『養蚕新論』を著して清涼育理論と上記蚕種製造建築の創出に貢献した田島弥平の旧宅は、現在国指定史跡・世界遺産として保存公開されている。

田島亀夫家は田島弥平家の同族で屋敷も近接し、田島亀夫(現当主)が8代目という。かつて「有隣館」(田島平内)の屋号で蚕種業を営み、販路は東京・茨城であった。

屋敷は南・西・北の3面を道で区画した矩形敷地で南面する。南面の道は前方が広大な畑に連なり、畑から望む屋敷景観は壮大である。南面道から6mほど下がった中央東寄りに薬医門形式の表門を構え、表門東脇に2階建て蚕室(マエノウチ)が北面して建ち、表門西は生垣で区切る。屋敷中央に2階建て主屋を南面して構え、主屋西に離れが南面して接続し、主屋西北隅に文庫蔵が東面する。主屋背面西寄りに井戸上屋があり、文庫蔵後方西寄りに乾蔵跡が残り、屋敷西北隅は鳥居を構えて屋敷神を祀る。一方、主屋東は屋敷境界に沿って穀蔵と便所が建つ。また主屋東北隅は大型の物置が建つ。主屋前方の空地(オモテニワ)は作業場で、屋敷西南隅は植栽が手入れされた庭となり生垣で囲い、西面生垣は南面よりずっと高く構え、防風・日除けの役割も果たす。主屋は明治元年頃の建築と推定され、離れは昭和14年の建築と伝える。

蚕室は、6尺2寸を1間として桁行6間・梁行3間の切妻造り・棧瓦葺き屋根の2階建てで北面し、北面に巾1間の棧瓦葺き下屋を設け土庇とする。屋頂に切妻造棧瓦葺きの換気用越屋根(通称「檜」)を2基備え、「2つ檜」蚕室として親しまれている。建築年代は明らかでないが、現当主によると明治末から大正初期頃ではないかという。柱は2階建て主体部を4寸角柱で土台建てとし貫・天井梁・軒桁・小屋梁で繋ぎ、下屋柱は3.8寸角で束石上に建ち柱頂は軒桁で繋ぎ主体部から繋ぎ梁を架す。

現状の蚕室1階はコンクリート土間の単室で、北面と東面に出入口を設け、天井は2階床をそのまま現した根太天井とし、正面中央東寄りに昇降口を設け、昇降口の西側は半間巾の棚を設ける。ただし桁行6間の中央に間仕切痕(天井梁に付鴨居)があり、東西2分して板戸で仕切り、東を貯桑場、西を桑もぎ場としていた時期が認められ、貯桑場天井は亜鉛引き鉄板で覆っている。またその当時の昇降口は西半部に存在した。2箇所出入口は北面東寄りと東側面西寄りにそれぞれ間口1.5間巾で設け、南面に間口各1間巾の窓を2箇所設ける。それ以外は土塗り真壁で、外部は北面を腰板壁、西面を下見板壁(2階まで)、南面と東面を波形鉄板(2階まで)で養生する。現状の北面出入口は、本来間口1間で指鴨居と土台に付敷鴨居を取り付けて大戸内引きとしていたが、昭和35年頃間口を西側に半間拵げて内法を鉄骨で補強し両開きの鉄扉を釣り込んだ。屋内に耕運機が入れるようにしたものである。本来の木製大戸は下屋の間仕切りに利用している。また、東側面出入口(シャッター)は、倉庫利用をはじめた昭和50年代に設置したもので、本来は土壁だった。外部の波形鉄板養生もこの時に行った。窓は鉄格子の内側にガラス障子引き違いとした形式で、現当主(83才)の記憶では変更はないという。また、正面西側に設けた棚も倉庫利用後の設置である。このように1階平面は出入口

の改造・増設が認められ、本来は北面西端から半間位置に間口1間の大戸片引き出入口を有していた。窓は変更がないらしい。また、昇降口は現在の位置よりも2間西寄りに設けていた。床は当初からコンクリート土間のようなものである。すなわち、建築当初は1階が貯桑場（当初から貯桑場と桑葉もぎ場に2分したか否かは不明）で、出入口は北面西寄りに柱間1間巾で設け、南面に1間巾の窓2箇所を設け、それ以外の柱間は半間間隔で密に設け土塗り真壁としていた。また、昇降口は比較的出入口に近い西半部の窓脇に設けていた。その後、昭和50年代に倉庫利用に転じた際に東側面のうち1.5間分を出入口としシャッターを設け、昇降口は本来より2間東へ移動させた。

2階は単室で、床は板張とし、天井は桁行方向に根太を配して簀子板を粗く配する。柱間装置は、南面の中央4間分と東側面の中央2間分を同規模の肘掛窓とし外雨戸を備える。また、北面中央4間分は窓として外雨戸を備え、窓下は土塗り真壁を挟んで掃き出し窓を設ける。それ以外の柱間は半間間隔で柱を密に配して土塗り真壁とする。なお、北面において窓と掃き出し窓の間に土壁部が存在するのは、外側に下屋屋根が取り付けられているためである。聞き取りによると、2階は蚕の上蔭（ジョウゾク：蚕に繭を作る場所を与える作業）のために用いたといい、第2次世界大戦中は島村に東芝工場が疎開してきた際の従業員居住用に提供（2家族使用）し、戦後は40年頃まで上蔭室として利用し、その後倉庫とした。すなわち、南・東・北の3面に大きな開口を設けた単室で、屋頂に2つ檜を備え、天井は粗い簀の子天井を設けるが密閉した形跡がなく、北面に掃き出し窓を設ける、など積極的に換気を行う清涼育理論に合致した形式である。掃き出しと雨戸以外の建具は現在失われているが、明かり障子引き違いであった。島村地区では主屋の2階全体を蚕室にする事例が多く、その多くが単室における3面開口と檜による積極的換気を指向し、明治中期までに開口を拡げて肘掛窓から手摺付の掃き出しに変化する傾向を持ち、清涼育理論によって蚕室が変化発展する経緯を見ることができる。その一方、明治中期以後は島村の蚕種製造家主屋の2階は、空間を分割して天井を設け、温度管理にも配慮する折衷育への変化が認められる。そうした中で当家の蚕室が、明治前半期までの島村蚕種製造家主屋の2階蚕室と同様な形式を留める点は注目される。蚕室の形式からいえば、明治中期頃まで島村で一般的だった清涼育用蚕室なので、建築年代はそれより遡ると考えるべきかもしれないが、上蔭用に特化した建築故に（時期的に温度管理に配慮することなく）、清涼育理論通りの形式を採用したと考えれば、時代的矛盾は生じない。

小屋組は、南面および北面の柱頂を軒桁で繋ぎ、軒桁間に柱間1間毎に小屋組を架け渡す。この小屋梁は両端を軒桁位置よりも指し延ばして出梁形式とし、先端に出桁を受け小天井を設けた「せがい造（出桁造形式の軒）」を構成する。一方、桁行は出梁上に1間間隔で2通り桁行梁を架け渡し、この上に小屋束を立てて2重梁を受ける。小屋束は、前記のほかに出梁上に半間間隔に立て、母屋桁あるいは2重梁を受ける。小屋貫は存在しない。2重梁上は中央に地棟梁を架け渡すとともに、4尺巾で檜（越屋根）用の小屋束を立て、この小屋束に本屋根の垂木掛を取り付ける。4尺×6尺の檜（越屋根）2基は、いずれも南面と北面に引き違い板戸を設け換気に備える。屋根垂木は1間6割（約1.03尺）で螻端は3枝目を破風板で見切る。屋根は檜（越屋根）とともに切妻造・棧瓦葺きとし、下屋屋根も含めて屋根端部は丸瓦を2筋伏せ、大棟は平瓦による青海波積棟とし、檜の棟は熨斗積棟とする。屋根は昭和35-40年頃に全面葺き替えを行っているが、基本的に瓦は再利用しているようで、小屋組には改造形跡は認められない。

2. 歴史的価値

田島亀夫家蚕室は、瓦葺き2階建ての「2つ檜（換気用越屋根）」を設けた建築で、北面に土庇を設け、1階は貯桑場、2階は蚕室であった。1階の開口部、内部間仕切り、天井鉄板覆い、昇降口移設、外壁一部の鉄板養生、など改装部分も認められるが、基本的に建築当初の規模を留める。特に2階は一時居室に用いたというが、ほぼ当初の状態を留めている。明治末～大正頃という建築年代は、1階西半の旧コンクリート土間が当初と考える上で説得力があり、貯桑場機能（桑葉の乾燥防止のため撒

水する) 向上の古例として注目される。また、2階蚕室が島村の清涼育用蚕室の形式を良く留める点は、上蔭室として特化した存在を考えれば納得できる。そしてこのことは、世界遺産の田島弥平旧宅桑場(1階を貯桑場、2階を蚕室とする「2つ檜」の棧瓦葺き2階建て建築で、明治27年頃の建築と考えられている)に関する調査研究を深化させる上で貴重な比較研究対象であることを意味する。

以上と1.建物の概要で述べた建築概要もふまえて田島亀夫家蚕室の歴史的価値をまとめると以下のようになる。

- 1) 建築当初の形式が容易に把握できるので、島村における清涼育展開の実態を知る上で貴重な存在である。島村の蚕種製造は主屋2階に設けた巨大な蚕室主体と考えられるが、附属屋としての専用蚕室において上蔭に特化した工程が展開していたかもしれない点、それ故に清涼育用に工夫された形式が折衷移行後も持続する点、などたいへん注目すべきである。
- 2) 上記の観点を含めて、田島弥平旧宅桑場との比較研究対象としてきわめて重要である。特に貯桑場とその上階における蚕室の役割解明は今後の重要な課題である。また、群馬県における独立した蚕室の遺構や調査研究事例が少ないことから見ても貴重な存在である。
- 3) 田島亀夫家は、島村の有力な蚕種製造家として屋敷内建築をほぼ留めている点で重要である。その中のひとつとして蚕室は存在意義が高い。
- 4) 柱間寸法は6.2尺を基準としている。この事実は島村における蚕種製造建築調査実績に照らし合わせると幕末以後の標準寸法といえる。ただし群馬県下の同時代建築は柱間6尺が標準であり、6.2尺という寸法は島村の蚕種製造建築の特徴を示すものである。

なお、田島亀夫家屋敷を南側から遠望したときに、正面右手に蚕室(2つ檜の2階建て建築)、その左手奥に主屋(3つ檜の2階建て建築)が並び建つ景観は、島村の代表的景観として広く知られている。

3. まとめ・総合的価値

以上田島亀夫家蚕室は、島村における附属屋としての蚕室の実態解明が途上である現在、田島弥平旧宅桑場とともに民家建築史上・産業技術史上において重要である。しかもその外観は、屋敷内建築群が充実している中であって正面構えの要として不可欠の存在でもある。さらに、島村の集落景観全体を俯瞰した場合、蚕種製造建築群としての価値を端的に示す存在としてもきわめて価値が高い。



屋敷正面をみる(右が蚕室、中央が主屋で主屋前に表門が建つ)。写真左端は田島昭次家主屋

撮影はすべて大野敏



屋敷東側の外便所・穀蔵・蚕室



屋敷背面 種蔵跡・井戸上屋・主屋・文庫蔵・屋敷神



蚕室南面・東側面全景 東側面のシャッターは後設



蚕室北面・西側面全景



蚕室北面下屋の仮設間仕切り転用の旧大戸



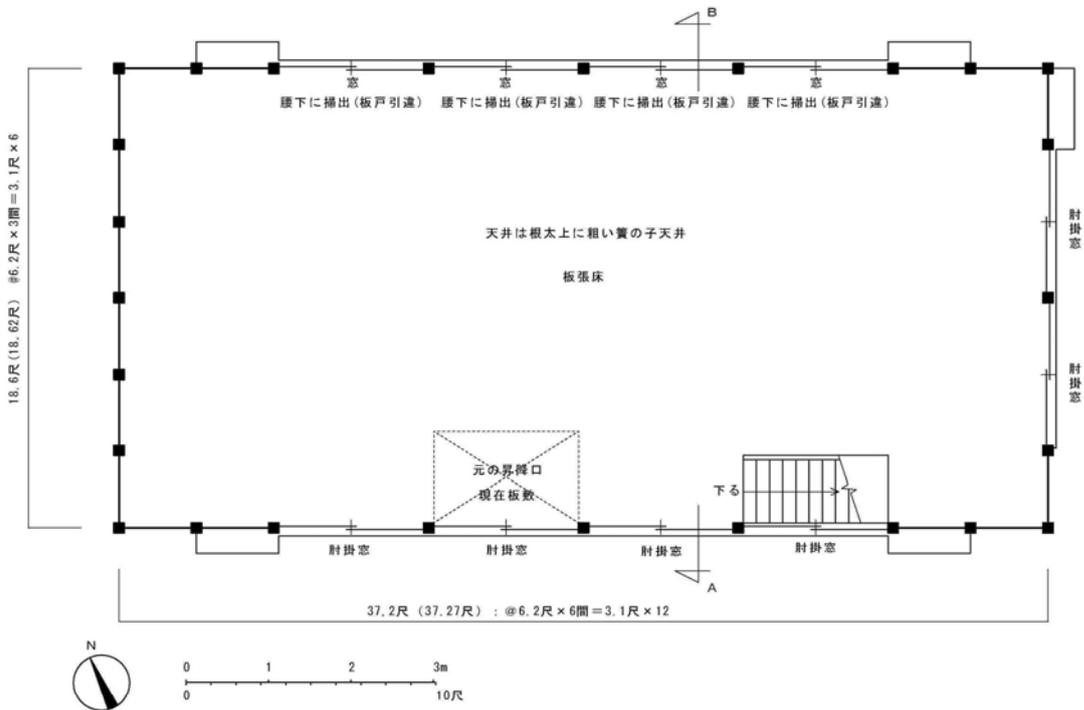
蚕室1階 東から西方を見る



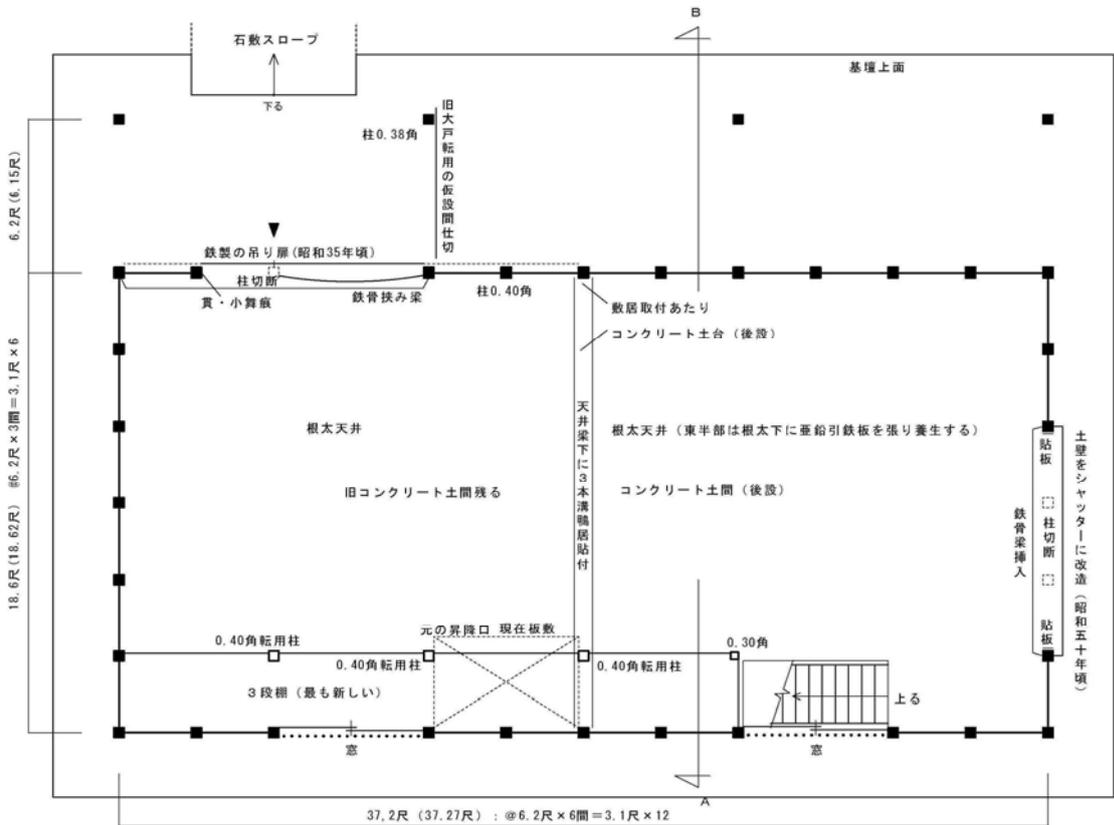
蚕室2階内部 東から西を見る



蚕室2階小屋組

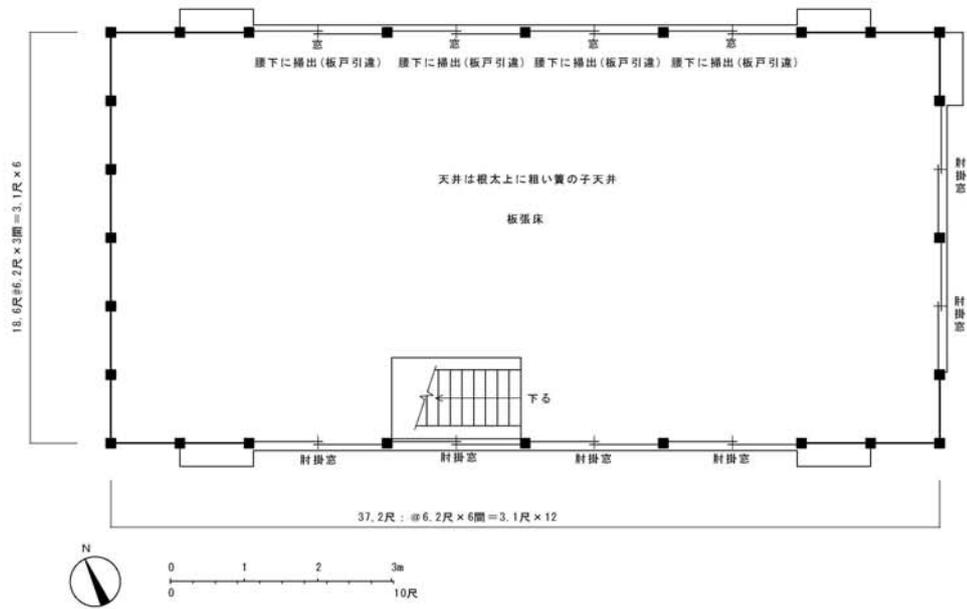


田島亀夫家蚕室 2階現状平面図 調査・作図 横浜国立大学 大野敏

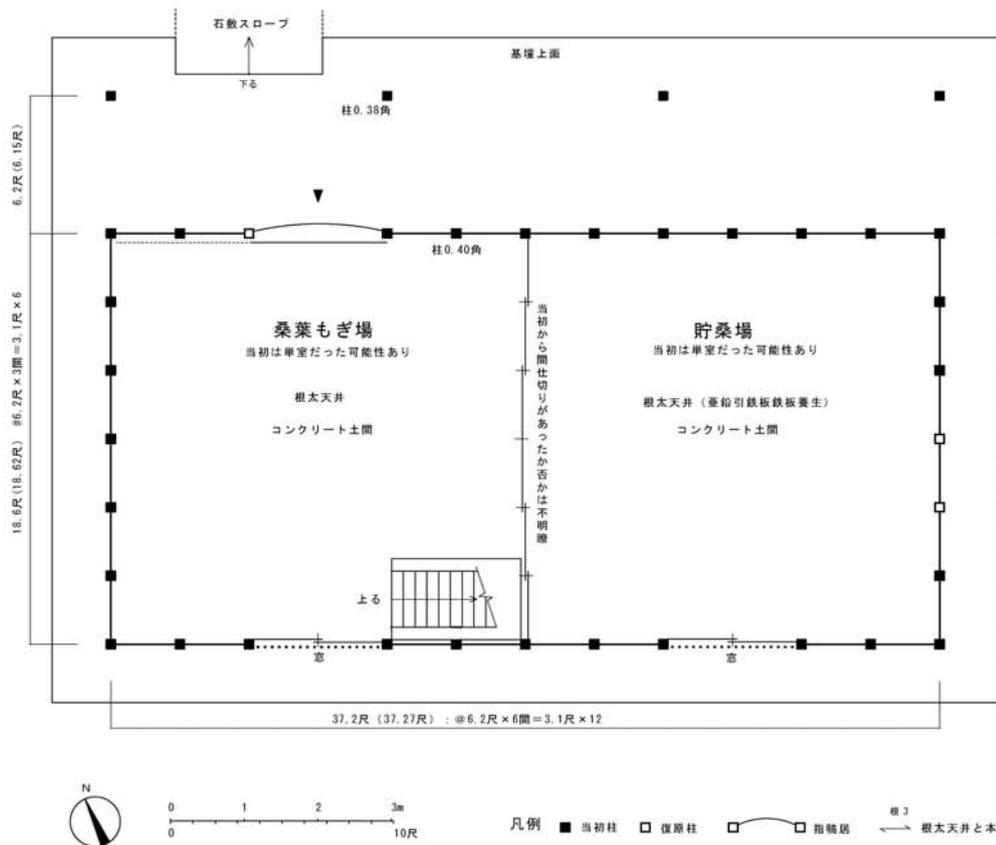


田島亀夫家蚕室 1階現状平面図 寸法は原則として計画尺で記し、実測値は () に記す 調査・作図 横浜国立大学 大野敏

凡例 ■ 当初柱 □ 後補柱 □ 指輪居 ← 根太天井と本敷

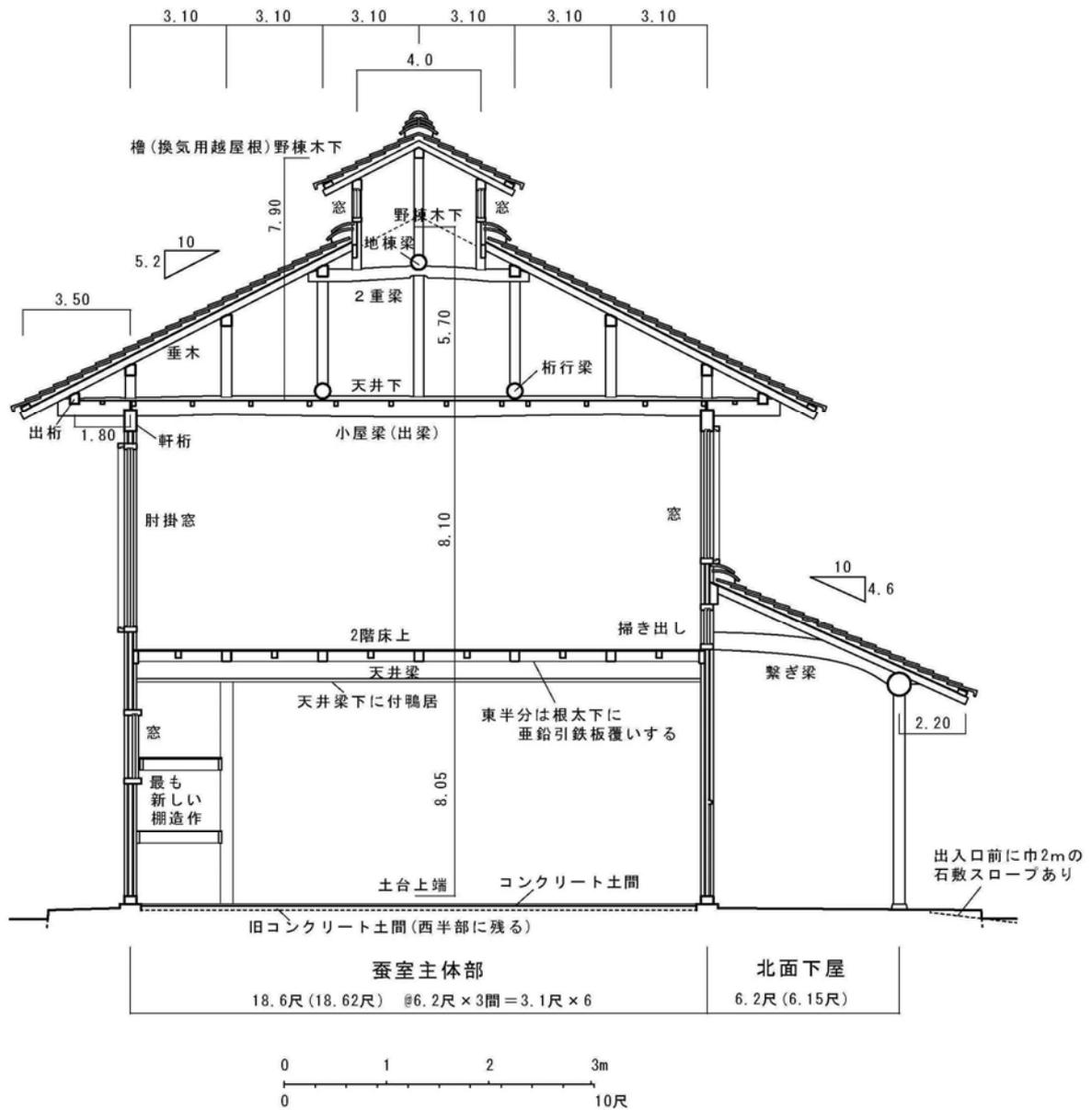


田島亀夫家蚕室 2階復原平面図 調査:作図 横浜国立大学 大野敏



田島亀夫家蚕室 1階復原平面図 寸法は原則として計画尺で記し、実測値は () に記す 調査:作図 横浜国立大学 大野敏

凡例 ■ 当初柱 □ 復原柱 ◻ 指輪居 根 3 根太天井と本数



田島亀夫家蚕室 現状梁行断面図(A-B) 調査:作図 横浜国立大学 大野敏
寸法は原則として計画尺で記し、実測値は()に記す